



農事普及だより

(4月号 平成30年4月1日～4月30日)

〔発行〕鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〔編集〕西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



(平成30年3月22日 仙台管区気象台発表 東北地方3か月予報より)

天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並みまたは高い確率ともに40%です。



健苗育成と通期作業で初期生育を確保しよう！

1. 育苗

(1) 浸種

浸種は10日～14日間程度（日平均積算水温で100℃が目安）とする。浸種時の水温はできるだけ10℃以下にならないようにする。低温で浸種した場合、日平均積算水温で100℃を確保しても、出芽不良や出芽遅れの原因となる場合があるので注意する。

(2) 催芽

種子に十分吸水させた後、育苗器などを利用して30～32℃で16～20時間加温し、ハト胸程度（芽の長さ0.5～1ミリ）にする。

催芽温度が40℃以上になると発芽率が低下するので、風呂を使う場合、温度を上げすぎないよう管理に細心の注意を払う。

(3) は種

は種量は、中苗で1箱当たり乾粉で100g（催芽粉で125g）とし、厚播きにならないよう注意する。

(4) 苗立枯病の予防

床土はpHを4.5～5.5の土を使用する（pHが高い場合はpH調整剤で調整する）。育苗中は適温を保ち、過湿や過乾燥を避ける。

薬剤による防除は、アまたはイの方法で予防する。

ア 粉剤の床土への混和【は種前1箱（床土約5l）当たり】

フザリウム菌、ピシウム菌：タチガレエースM粉剤 8g

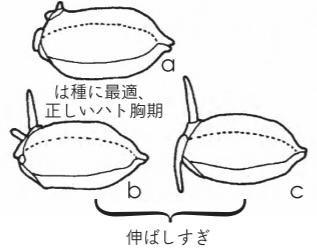
リゾープス菌（くもの巣カビ）：ダコニール粉剤 15～20g

イ 液剤・フロアブル剤の床土へのかん注（は種時1箱当たり）

フザリウム菌、ピシウム菌：タチガレエースM液剤の500～1,000倍液を500ml、または1,000倍液を1リットル

リゾープス菌（くもの巣カビ）：ダコニール1000の500倍液を500ml、

または1,000倍液を1リットル



※タチガレエースM粉剤・液剤の使用回数（箱育苗）

育苗時にタチガレエースM粉剤とタチガレエースM液剤を使用できる回数は各々1回以内。ただし、タチガレン液剤は、タチガレエースM剤を使用した後に1回まで使用可能。

〈タチガレエースM剤の使用例（発芽後に土壤かん注をする場合）〉

使用時期	土壤混和	は種時土壤かん注	発芽後土壤かん注
例1	タチガレエースM粉剤	—	タチガレエースM液剤
例2	タチガレエースM粉剤	—	タチガレン液剤
例3	—	タチガレエースM液剤	タチガレン液剤

(5) 育苗箱の施肥

床土の施肥は、中苗散播・基肥方式で窒素・リン酸・カリを成分量で各2.5g/箱とする。

(6) 置床の準備

ア ハウス育苗方式

置床は育苗箱の底と密着するように均平にする。碎土が不十分な場合や足跡等のくぼみがあると生育ムラができるので十分注意する。

イ トンネル折衷育苗方式

置床の硬さは耳たぶ程度に調整し、必ず排水溝を設ける。育苗箱が床土に沈み込むような硬さだと、過湿による出芽障害となるので注意する。

(7) 温度管理

生育に合わせた温度管理を行うため、必ず温度計を苗の高さに設置する。

ア 出芽期まで

日中35℃以下。ハウスでは、シルバーポリトウなどで被覆し、水分保持と保温をする。天気の良い日には、出芽前でもハウスの換気を行い、35℃以上にならないように注意する（シルバーポリトウは風めくれないように箱下に折り込むか、重しを置く）。

1. 出芽揃期～1.5葉

日中30℃以下。ハウスの大部分の箱で7～8割程度の出芽が見えた後、早めに被覆資材を除覆する。持ち上がった覆土はかん水等で落ちさせ、種粒が露出していたら土をかける。

ウ 1.5～3葉 日中25℃以下。

日中20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

エ 3葉以降

日中20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

※霜・低温が予想される場合

被覆資材での二重被覆を行うか、ハウス内に暖房器具を入れて保温する。

(8) 水管理

かん水は、床土が乾いたら午前中（地温が上がる前）にたっぷり行う。

機械的に毎日かん水すると、箱内の根張りを弱くし、軟弱徒長苗になりやすいので、かん水の回数は控え気味に管理する。

折衷苗代では、過湿にならないよう排水溝を必ず設置する。

2. 本田作業

(1) 施肥（基肥）

米の品質と食味向上のため、窒素施肥総量は、「つがるロマン」の場合6～8kg/10a、「まっしぐら」の場合7～10kg/10aとする。基肥量は1回追肥体系の場合は総量の7～8割、2回追肥体系の場合は総量の6割とする（側条施肥の場合は、基肥を2割減ずる）。「青天の霹靂」の基肥窒素成分は6kg/10a以内とする。全層施肥1回追肥体系を原則とする。

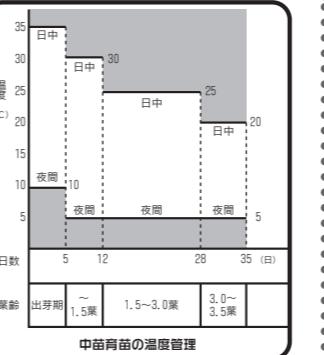
多肥栽培では、倒伏したり、いもち病にかかりやすくなるほか、食味・品質の低下につながるので、昨年のいもち病の発生程度や倒伏状況に応じて基肥量を減らす。

大豆の復元田では、生育が過剰となり、倒伏のおそれがあるので基肥8割減～無肥料とし、追肥は生育量や葉色を見て判断する。倒伏軽減と初期生育確保、登熟向上のため、ケイカルとよりんを施用すると効果的である。

(2) 耕起・代かき

耕起作業はていねいに行い、耕す深さは15cm程度を目標とする。

稻わらを鋤き込んだ水田では、浮きわらを抑えるため、水深を浅めにして代かき作業をする。



排水対策や適期追肥に努めよう！

1. 濡害防止

転換畠等では、融雪水、降雨水が長時間停滞しないよう、明きょや排水溝の補修、補強を行い、ほ場外に速やかに排水できるようにしておく。

2. 追肥

消雪後、幼穗形成期までのなるべく早い時期に追肥を行う。

追肥量は窒素成分で2kg/10aを基準とし、融雪遅れによる生育遅延、ほ場の地力等を考慮して増減する。

3. 病害虫防除

越冬前の生育量が多く繁茂しているほ場では、うどんこ病の被害が大きくなるので、適期防除に努める。

春の農作業安全運動実施中

4月1日～5月31日

声をかけあい 助けあい 農作業事故ゼロ

まずはワンチェック、
ワンアクションで農作業安全



黒星病対策を徹底しよう！！

りんごの発芽は平年並みの見込みである。黒星病の菌密度を下げるために、越冬落葉（被害葉）は雪がとけたら、できるだけ早く対策する。

1. 黒星病対策

(1) 越冬落葉の除去

越冬落葉をレーキ等で集め、ほ場の外へ搬出し処分する。

(2) 越冬落葉のすき込み

樹の根元の越冬落葉をレーキ等で機械走行路に集め、小型耕うん機や低床トラクターなどを使って、深さ5cmで1回耕うんする。

(3) 昨年、黒星病の発生が多かった園地については、「ふじの芽出し当時（発芽8～9割頃）」に、ペフラン液剤25を特別散布する。

2. 霜害防止対策

晴天無風で、前日午後7時の気温が6℃以下のときに降霜の危険性が高い。霜害が予想される場合には、気象台から霜注意報が発令されるので、これらの情報に注意する。

(1) 防霜ファンによる防止

防霜ファンの始動温度を2℃に設定する。寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が小さいので燃焼法を併用する。

(2) 燃焼法による防止

あらかじめ燃焼資材を園地内に配置しておき、気温が0℃になったら点火する。

○ 霜カット

おがくずと灯油を2:1（容量）の割合で混ぜたものを、2kgずつ袋等に入れて10a当たり40～60個配置する。

○ A 重油

4ℓ缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。

※燃焼法を利用する場合は、「火災と紛らわしい煙または火災を発する恐れがある行為の届出書」を所轄の消防署に提出する。

3. 粗皮削り

粗皮削りは、胴腐らんの早期発見やハダニ類、クワコナカイガラムシの防除に役立つので、必ず実施する。

4. 野そ被害樹の治療

樹幹を食害された場合、樹皮が幹周の4分の1以上残っているものは早めにバッチャレートを塗るか、テープを巻いてカルス形成を促す。

5. 基肥

基肥は4月20日頃までに施用する。石灰質肥料は基肥を施用後、降雨があった場合は2～3日後に、降雨がない場合には2週間後を目安に施用する。

肥料の施用量は下表のとおりであるが、追肥を計画している園地では、窒素分の6割を基肥とする。

なお、果実の着色が良くない園地や樹勢が強すぎる園地では、窒素分を半分に減らす。

りんごの標準施肥量（年間総量／園地全面施用）

区分	施肥量(kg/10a)	備考
普通台樹 わい性台樹	窒素 リン酸 カリ	
成木 6～10年生 1～5年生	15 10 5	部分（樹冠下） 施肥の場合は、施肥量を減らす
1～3年生	2	

6. 薬剤散布

4月は主要病害虫の重要防除時期であることから、散布適期を逃さないよう注意する。また、散布間隔は10日以内を厳守し、散布量は節約しない。

散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a

<tbl_r cells="3" ix="3" maxcspan="1" maxrspan="1" usedcols

ぶどう

休眠期防除は晚腐病や黒とう病防除の要、霜害防止対策を徹底しよう!!

1. 霜害防止対策

晩霜のおそれがあるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。詳細はりんごの項を参照。
ハウスぶどうでは、ハウス内を石油ストーブなどの暖房器具を用いて加温する。

2. 野ネズミ被害の事後対策

野その食害により回復が見込めない場合は、苗木更新する。

3. 園地の点検

雪で傾いた支柱や破損した腕木を取り替え、架線の緩んでいるものは、補強して主枝を結束し直す。また、病害の発生源となる架線上の巻きひげや成り跡、粗皮を除去し処分する。

4. 施肥

基肥を秋に施用している園地では、4月上旬に全量の10%を追肥として施用する。また、春に基肥を施用する園地では、全量の60~80%を施用する。

〈ぶどう成木の標準施肥量(kg/10a)〉

区分	窒素	りん酸	カリ
全量	15	10	10
春が追肥の場合(秋に基肥)	1.5	1	1
春が基肥の場合	9~12	6~8	6~8

○安心な農産物生産のため、農薬使用状況を必ず記帳しましょう。

○農薬使用の際には、必ず使用者の責任で最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。

○短期曝露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、容器に表示された使用方法ではなく、変更後の使用方法に基づいて使用しましょう。

5. 病害虫防除

休眠期は、晚腐病や黒とう病防除の要なので、必ず薬剤散布する。

・薬剤散布(スチューベン基準)

散布時期	基準薬剤	散布量 kg/10a
ガットキラー乳剤 休眠期(4月中旬)	100倍 200倍	100倍 200倍
デランプロアブル 又はパスポート顆粒水和剤 又はベンレート水和剤	250倍 200倍	200倍



*農薬はぶどう他の作物に飛散させない。近隣の住宅等や

とうとう

摘芽で大玉生産、霜害防止対策の徹底しよう!!

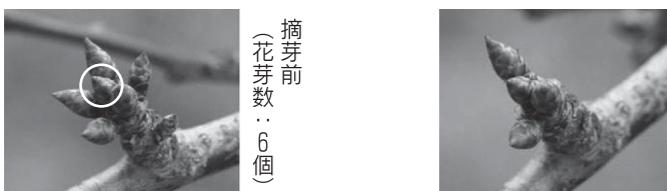
1. 霜害防止対策

晩霜の恐れがあるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。詳細はりんごの項を参照。

2. 摘芽

紅秀峰は着果量が多くなりやすいので、催芽前(4月上旬頃)までに摘芽を行う。花束状短果枝の大きい花芽を3芽程度残して、他の花芽を指でかき取る。葉芽(○で囲んだ芽)は残し、人工授粉は必ず行う。

なお、晩霜の常襲地帯や花芽の少ない樹、樹勢の強い樹では行わない。



3. 結実確保

とうとうの開花期は、低温や強風に遭遇することが多い時期であることから、マメコバチを導入して园地であっても、毛ばたきによる人工授粉を徹底する。毛ばたき授粉は、5分咲き頃と満開期の2回実施する。

4. 病害虫防除

「開花直前」以降は、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。



*農薬はとうとう他の作物、園の

・薬剤散布

散布時期	基準薬剤	散布量 kg/10a
発芽前	マシン油乳剤(97)	50倍 350
開花直前	オーソサイド水和剤80	800倍 450

野菜

温度変化が激しい時期、きめ細かな温度管理に努めよう!

トマト

1.鉢上げ後の管理

鉢上げ後、しばらくは鉢底に根を張らせるために、できるだけかん水は行わない。本葉4枚前後になって下葉が1枚萎れたら鉢底までの浸透を目安にかん水を行い、その後、本葉6枚までは下葉が1枚萎れたら軽くかん水する。

本葉6~8枚頃は急に伸びるため、下葉が2~3葉萎れたら軽くかん水し、やや乾き気味にして徒長を防ぐ。

本葉8枚になったら鉢の底までかん水し、その後定植までは萎れない程度に軽くかん水して鉢の上部まで根を増やす。

最高気温は、定植5日前までは20~25℃で管理する。最低気温は、鉢上げ後~本葉3.5枚までは16~18℃、本葉6枚までは14~16℃、本葉9枚までは12~14℃、定植までは12℃以下にしないよう管理する。

徒長を防ぐため、本葉が4枚と7枚頃に葉が重ならないように鉢ずらしを行う。

2.定植準備

堆肥や改良資材等は定植1か月前を、基肥は定植2週間前を目安に施用する。

〈施肥基準(成分量kg/10a)〉

条件	窒素	りん酸	カリ	備考
新作地	10~12	28~35	10~12	・施肥量は土壤分析に基づいて決める。 ・接ぎ木苗の場合は窒素成分量を10~20%減ずる。

定植の7~10日前にはマルチを張り、深さ10cmの地温を15℃以上に高めておく。

3.定植

定植作業はなるべく温暖な日に行い、その2~3時間前に鉢にかん水するが、肥料不足の場合は、追肥を兼ねて行う。

植え付けは、花房を通路側に向け、鉢の回りを両手で上から押して土と根鉢を密着させ、根鉢上面と畠面が同じ高さになるようを行う。植穴を掘ったときに出た土は植穴の周囲に盛り土として置き、マルチの熱が逃げないようにする。

夜間の冷え込みが予想される場合は、ハウスを早めに閉じ、保温に努める。また、可能な場合は、不織布等でべたかけを行い保温する。

2.本畑の準備

堆肥や改良資材等は定植2週間前に、基肥は定植10日前に施用する。畠の高さは、畠地では20cm、転作田では30cmの高畠とする。

定植の1週間前にはマルチ、トンネルを張る。マルチは、地温上昇効果や抑草効果の高いグリーンマルチを使用し、深さ20cmの地温を18℃以上に高めておく。

3.定植

速やかな活着を促すため、定植作業はなるべく温暖な日に行う。

夜間の冷え込みが予想される場合は、早めにトンネル被覆資材を閉じるとともに、保温キップや不織布などの資材の併用し、保温に努める。

花き

ハウスの温度管理を徹底しよう!

キク

1.7月・8月出し栽培の管理

(1)育苗

育苗期間は15~20日を基本とし、定植期に合わせて計画的に挿し芽を行う。早期発芽する品種もあるので、電照等により花芽分化を抑制する。

(2)施肥

全量で窒素成分1~2kg/aを基準とし、基肥として6~7割を施用する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

(3)定植

ハウス栽培では4月が定植適期となる。早すぎると奇形花等が発生しやすく、遅すぎると草丈が短くなるので、品種や仕立方法を考慮して定植時期を決定する。

定植後は活着を促すため、むらなく十分にかん水し、10℃を目標に夜温を確保する。活着後は、昼温25℃、夜温5℃程度を目安とし、必要に応じて保温や換気を行う。

トケコギキョウ

1.夏出し栽培の管理

(1)秋播き無加温栽培

日照量の増加、気温の上昇に伴い茎が伸長してくるので、発芽まで極端に乾燥させないよう管理する。低節位から分枝が発生した場合は早めに除去して主茎の伸長を促す。

(2)春播き栽培(4月定植)

圃場のpHが低い場合、pH6.5を目標に土壤改良する。基本の基肥は3要素とも1kg/a程度であるが、ECの土壤診断結果によっては減肥する。

〈施肥前EC値による基肥窒素量補正の目安(対基準量)〉

(加藤、1996)

土壤の種類	0.3ms/cm以下	0.4~0.7	0.8~1.2	1.3~1.5	1.5以上
腐植質黒ボク土	2/3	1/2	1/3		
沖積土・洪積土		1/3			
砂質土	1/2	1/4			無施用

定植前に地温を12~20℃に高めておき、定植適期の本葉2.0~2.5枚の時に定植する。

定植後のかん水は地温が急激に下がらないよう暖かい日の午前に行い、極端に乾燥しないようこまめに行う。

2.春播き秋出し栽培のは種・育苗

育苗用土はpH6.5前後で肥料成分が含まれている清潔なものを使う。

は種~発芽までは、昼温25℃前後、夜温15~18℃を目標に管理する。は種後は乾燥させないように努める。底面給水方法で育苗する場合は、常時底面を水に浸けず、十分給水したら水から上げる。

発芽揃い後は、昼温15~20℃、夜温15℃程度を目安とする。かん水は第1葉が広がる頃から徐々に控えめにし、追肥は葉色をみながら7~10日間隔で液肥を施す。

輸入粗飼料に由来する堆肥を使用する際にはご注意ください!

輸入粗飼料を給餌した家畜の排泄物を堆肥の原料として使用した場合、海外で使用された除草剤(クロピラリド)により、作物の生育に障害を起こす可能性があります。

~被害を未然に防止するため~

○堆肥の情報を集めましょう。

○堆肥の施用量を遵守しましょう。

[農業の相談はこちらへ]

農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。

鶴田町農業支援センター

午前9時から午後5時まで2111(役場産業課)

~農事普及だよりは町ホームページにも掲載しております~

URL <http://www.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>

